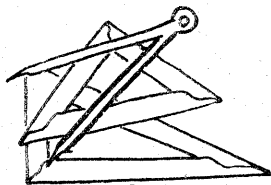


知能テストについて



小口 忠彦

1

日本人の欠点の一つとして、「底がない」ということがいわれています。これは、深みがあるということではなくて、正体がかめないというようないみです。

けっしてありがたいレッテルではないのですが、事実だとすれば、あらためるよりしかたはありません。パリーの一角から流れだされる、いわゆるパリーモードなるものも、本場のフランス人よりはむしろ日本人のほうが勢をあげているくらいらしいのですが、そういう気持ちでいる人がなにかちょっとした異変でもあると、「なあーんだ、あんなもの」といったぐあいにはタンカを切ることもなるのですから、「底がしれない」などというレッテルをはりつけられるのも、理由がないわけではないでしょう。

知能テストについても、だいたいおなじようなことがいえるようにおもいます。

戦後しばらくたってから、雨後のタケノコのようにたくさんテストがつくりだされました。テストと名のつくもの一つのことらず数えあげたら、おびただしい数になって、いささかおどろかされるにちがいありません。むろん、これらのテストのなかには知能テストもふくまれているわけですが、知能テストだけでもよほどの数になるはずはです。

これらの知能テストは、とうとうとして現場へながれこんでいった観がありました。おそらく現場のほうでは、追いたてられるようなかたちで受けいれていたのではなかったでしょうか。知能テストそのものが、まだ十分にできあがっていないのではないのですし、それに「知能」とは、個人が生れつき所有している「可能的能力」のことであって、見ることもさわることもできないのですから、知能テストを十分に消化することはできないはずはです。テストを実施だけはしてみてもそこから出てくる数字がほんとうに個人の知能をしめしているのかどうかにつ

いて、半信半疑以上にでられるはずはないとおもわれます。テストには必ずついている「手引」に書いてある注意どおりにやり、手引のおわりのほうにのっている数字とにらめっこをして、個人別に数字をだしてみると、何やら、自分の気持ちがおちつく、というあたりが実情だったのではないのでしょうか。

せきたてられているようなフニキのうち、知能テストがおこなわれていたのは仕方がなかったとしても、そこには、ぬぐいたいようなゆきすぎはなかったであろうか。半信半疑のうちにも、テストの結果、でてきた数字に必要な以上の権威をもたせてしまい、場合によると知能指数が五点くらいの差であっても、「Aさんのほうが、Bさんよりも五点だけすぐれている」といったぐあいに、あっさり人間の評価をしていたきらいはなかったでしょうか。テストを実施した人、すなわち指導者としての立場にたっている人は、それほどあっさりと評していなかったとしても、この数字を家庭へ連らく

するときには、思いならずも力をいれすぎて、わが子の知能をおもいあがつて解釈させたり、わが子の能力にひかきせてしまったりするようなヘイガイをあたえてはいなかったでしょうか。わたしは、こうしたヘイガイは目にも見えないところで、そうとう行われてしまったのではないかとおもいます。

けっきよくのところは、知能テストが十分に科学的水準にたっしていないところへもってきて、現場のほうでは多少ともせきたてられてしまったことに原因があるようにおもいますが、現在としては、散る花を追うなかれ、であって、今後おきなりようにすることが大切でしょう。ちょっとわき道にそれますが、テストの出版社にも注意してもらおうのがよいとおもわれます。テストが出来れば、つきには売ることが問題になります。たくさん売るためには、うまいセンデンをしなければならぬ。あまり正直にやると売れゆきにかんけいしますから、くさいところはなるべく上手にフタをして、

センデン文をよんだだけでとびつきたくなるような名文句を工夫することになりましょう。むろん、すべての出版社というのではないのですが、なかなかセンデンの上手な出版社もあるものです。実は何のセンデンでもそうですが、下手なセンデンというものはまず無いとおもってまぢがいないうしから、とくに教育にかんしたセンデンなどのばあいは、割引きして読んでおくほうがよいようにおもいます。

とにかくも知能テストにたいして「過信」だった一面は、おおいがたいようです。ところが、ごく最近になってからは「知能テストなんて何の能もない」という声が、あちこちから出はじめてきました。むろん、金殿的というのではなく、なかには、しんけん（しんけん）と取りくんでいる人たちもいるのですが、それでも「知能テストの寸法もわかった。たいしたものじゃないね」といった気持がだん／＼にひろまってくる傾向がみうけられるようです。もし、そうだとしたら「過

信」から「不信」へ逆転することになり、こんなところからも「底のしれない」人たちがうまれるわけです。けっしてよいことではありません。

知能テストにたいしての健全な態度は「過信」と「不信」とをさけて、あくまでも冷静に、テストを認識することだとおもいます。

2

知能テストに、A式・B式・A B式というようなきまぐれな様式があることはすでに誰でもが知っていますし、これらのうちで、幼児用としては、A式とB式とがもっともふつうに用いられているところでも、ひろく知られているところです。

A式の代表的なものとしては、鈴木治太郎氏の「実際の個別的知能測定法」（鈴木ビネー法）と、田中寛一博士の「田中ビネー式知能検査法」とが、しばしばあげられますし、B式の代表的なものとしては、田中博士の「幼児用田中B式知能検査」がしばしばあげられています。牛

島義友博士らの「乳幼児精神発達検査」は、A B式のようにつくられています。やはり、B式の代表的なものとしてかぞえるのがよいのではないかとおもわれます。

ここにあげたのは、もっとも代表的なものとして用いられているものだけで、むろん、この他にもよいテストはあるのですが、フランスのビネーがはじめて知能テストをつくった時からほぼ五〇年、その間、わが国では、主として、田中・牛島というオーソドックスな軸をめぐって大きな発展をしてきたことを、忘れてはならないようにおもわれるのです。

ところで、A式のものでは、コトバをうまくつかひこなすことが非常にたいせつなやくわりをしめることになりますので、ややともすれば、コトバをつかひこなす能力だけが知能としてとりあつかわれるくらいがみられますし、また、逆にB式のものでは、コトバをつかひこなす能力がうきたしていきらないが、ありますので、けっきょくのところ、A式とB

式とを併用するのが無難だということになりましょう。とくに、ちか頃よく用いられている「描画式」の知能テストの場合などは、A式のテストの結果とひきくらべてみる必要があるようにおもわれます。

3

つぎに、B式のテストを中心として、テストをつくる際の目ぼしい点の二、三を解説してみましよう。そうすれば、多少ともテストについての認識のしかたがふかめられはしないかとおもわれます。

ご承知のように、B式のテストは、いくつかの問題群からできていて、テストをうける人は、これらの問題群のどれにも手をつけることになっています。問題群の数は、テストによっていくぶんちがっているのですが、それでも、異同を見分ける能力、置きかえる能力、数をあつからう能力、記憶する能力、推理する能力などは、たいして、とりいれられています。これは、研究の結果、知能はいくつ

かの能力をふくんでいることがあきらかになつてきたからのことで、思いつきで問題をえらんでゐるわけではありませぬ。

これらの問題群をえらぶ際に、つぎのような注意も必要になります。都会とか田舎とかいう地域のぐあいに影さようさされないこと。都会に住んでゐるために有利になつたり、田舎に住んでゐるために有利になつたり、というような問題ではよくないわけです。それから、少しくらい練習しても、その効果があらわれないこと。しかし、これは無理の相談といふもので、練習すれば多少とも成績はよくなつてしまいますから、できるだけそういう効果があらわれないような問題を選ばうことにならうでしょう。それから、また、テストを受ける人たちに興味をもたせるような問題であることもたいせつなことです。とくに、幼児の場合などでは色ずりなどにして、この点に細心の注意をはらつてゐるようです。また、テストの問題は、基礎的のものでないとこまり

ます。つまり、これらの問題をうまく解決できれば、日常生活のあれこれが解決できるのと同じことだというように、応用性のあることがたいせつです。まあ、ざつといつても、このくらの点には注意していなければいけないでしょうからテストをつくるのも決して生やさしいことではありません。

こうして、ひと通りの問題をえらびおわつたら、これを、適用年令にぞくしてゐる人たち二〇〇名くらいに予備実験してみ、問題を検討したり、時間のあらましをきめたり、教示のぐあいをしらべたりします。しかし、予備実験ですからまだとば口です。

いよく本式に被験者をえらぶときには、地域や家庭の職業などを考りよに入れて、各年令群の人たちを五〇〇名前後くらいづつえらぶのがふつうとされてゐます。もし、四才から八才までの子どもに適用するテストをつくるとすれば、二五〇名くらいの被験者をえらぶことになりまふ。もちろん、もっとたくさん

被験者をえらぶこともあるのですが、要は、えらばれた被験者が適令年令にぞくしてゐるすべての人たちに対して代表性をもつてゐるかどうかであつて、下手なえらびかたをすると、いわゆる「見本誤差」が大きくなつて、テストの生命にだげきをあたえることになりまふ。

問題もひと通りできあがり、被験者もえらばれたら、だん／＼と細い点の検討にとりかゝらなければなりません。要点の一つ二つについてのべましよう。

どの問題群についてもいえることですが、どの年令群でも、一〇〇点満点に換算するとしたら、平均して六〇点前後、もっと具体的にいいますと、年令のひくい人たちでは五〇点くらい、年令のたかい人たちでは七〇点くらいとれることがのぞましい。いくら年令がひくいとはいつても、平均して二〇点とか三〇点では問題がむずかしすぎることにまふしまた、最高年令とはいつても、満点にかいようでは問題が甘すぎることになるからです。ふつう、こうした検討を「通

過率」の算出といつて、%でだすことになつています。ところで、平均点というものはなかくのクセモノで、うっかりしている、とんだしくじりをしてしまふのです。たとえば、平均点が五〇としても、実際にはさまざまの場合があります。全員がそろつて五〇でも平均点は五〇ですが、全員の半分が満点で、のこりの半分が〇点でも、やはり平均点は五〇になるはずで、してみると、平均を算出しただけでは、問題の難易度は十分に知らべられてはいきけません。

そこで各年令群ごとに、どの問題群についても、得点の分布状態をしらべてみることが必要になります。もし平均点前後の得点をした人員数をもっとも多く、それより得点の高い人員数と、それより得点のひくい人員数とが、しだいに少くなつていて、全体としてみたとき、フジ山やツリガネに似たようなかっこうになつておればよいのですが、そうでないとぐあいかわるゝことになります。

この検討がすんだならば、どの問題群

についても、年令群のあいだの平均点の比較をしてみる必要がでてきます。つまり、同じ問題をあたえてあるわけですから、ひくい年令群よりも、たかい年令群のほうが、平均点が高くて当然のはずですから、そのぐあいをしらべてみるわけです。もし、四才から五才、五才から六才、というように年令がふえるにしたがつて平均点が上昇していかないようならばあきらかに、ぐあいはわるいことになります。いやでもおうでも、上昇曲線になるようにあらためなければならぬのです。

ざつとつて、こんな調子で、問題を多少あらためたり、また、テスト時間をきめることになります。これだけでも、並たいいていのことではありません。実際についていられる努力は、ばく大なものです。しかも、まじめなテストほど、その努力は増すことになるわけです。

これで、峠はこえていともいえるのですが、実はまだくゝいくつかの手つづきを經ないといけません。

えらんだ問題を、問題群ごとにみますと、数がちがつているのがふつうです。

たとえば、1番の問題群には一六の問題がはいつており、4番の問題群には九〇の問題がはいつていゝというように。

したがつて、いわゆる「粗点」のままではケイサンするとすれば、問題群には、重みの差があることになるわけですが、これは「知能」の本質にそつていゝやりかたとはいへません。そこで、各問題群の重みをそろゝることが必要になつてきます。

以上のほかに、問題群のあいだの相関度、各々の問題群とテスト全体とのあいだの相関度、いわゆる「妥当性」や「信頼度」の検討など、もりたくさんの検討がのこされていゝのですが、ここでは省略したいとおもいます。

以上の解説だけで、わたくしのお話したいところをよみとつていただけるとおもわれるからです。かんたんに知能テストなどといつてみても、いざつくることになると、人知れぬ苦心がはらわれま

す。ややこしい数字ととくんで、まじめに、たんねんに、まとめあげてゆかなければならないのです。とくにまじめにつくられた知能テストにたいしては、そのたりない点を汲みとり、これを育てあげるような気持にならなければならぬのではないでしようか。十分に科学的水準にたっしていないにしても、こうした努力を注ぎこみ、検討に検討をくわえながらさすぎあげた成果のすべてを切りくずすことなど、とうていできることではありません。「テストなんて能もない」などとタンカをきつてみても、まじめなテストならば、びくともしませんし、そういう底のしれない人を、あわれにおもろかもしれません。「不信」をさける必要は、実のところ、こうした点とつながっていることになるのです。

しかし、同時に、以上のところから、「過信」をさける必要もよみとらないといけないとおもいます。つまり、テストを標準化するために必要な手つづきの基礎には、統計がよこたわっており、この

統計は、要するに「平均」をめぐって廻転していることになるのですが、かいつまんでいえば、平均とは「大体」ということにほかなりませんから、テストの結果でてくる数字には「大体」というニオイがしみこんでいることになり、しかも、生れつきの能力をしらべようとしているにもかかわらず、えらばれる問題にはすでに経験的な色がついていて、地域とか練習とかいったことによつて、多少とも影きよされることを防ぎきれないのです。また、教示のあたえかた、その時の身体ぐあい、その時のフンイキなどによつても、多少の動揺は防げないでしよから、たとえば知能指数ですとどんなにもちくらしいの動揺は承知のうえでない、ゆきすぎにおちいるきけんがあるとおもわれます。

4

幼児のばあいには、つぎの点に着目していることも、必要だとおもわれるのです。

だいたい、知能のテイドと日常生活における活動（もつともふつうの場合は「学業成績」としてあらわれます）のテイドとのあいだには、児童期→青年前期→青年中期→青年後期と、発達段階がすすむにつれて、ミゾができてきます。つまり、小学校の時代ですと、ひじょうに高い相関度があつて、知能指数（あるいは知能偏差値）のたかい者はたいして学業成績もよいのですが、中学時代になりやがて高等学校・大学となるにつれてこの相関度がひくくなつてしまふのです。大きくなるにつれて、気持がフクザツになり、えんりよしたり反抗をしたりするテイドがたかくなりますから、いきおい持ちまえの能力のありつたけが日常生活の活動のうえにハダカのままですらけ出されることがぼんやりしてくるわけです。

この関係を、幼児のところまでひきおぼしてくると、幼児は、持ちまえの能力のありつたけを、そのまま日常生活の活動のうえにさらけだしているとおも

ひどいあやまちをおかすことにはならないのではないでしょうか。もっとも、こゝうはいましても、すでに4才前後に「第一反抗期」にはいりますから、青年期と似た現象があらわれ始めるのを注意していなければならぬのですが、それにしても、青年期のようにフクザツとはいえませんから、よほど特別の反抗や内気などの場合をのぞけば、まずまず、ハダカとおもつてよいようにおもわれるのです。したがって、日頃の「言動」をこまかに観察しておれば、知能テストに劣らないほどの認識が得られるのではないでしょうか。

こんなわけで、とくに幼児のばあいには、知能テストの結果だけにたよらないで、日頃の観察とてらしあわせてみることはたいせつなことです。そうして、そのためには、知能テストの結果を整理するばあい、「年令尺度」にもとづく知能指数(I・Q)よりは、「点数尺度」にもとづく知能偏差値のほうがつごうがよいのですから、ぜひとも「偏差値」の用

いられるいみとそのあつかいかたについて理解しておきたいものです。

5

A 「○○式の知能テストが大分つかわれているようですが、あのテスト、そんなにすぐれているのですか？」

B 「やってみるのはよいが、学籍簿には記入しないほうがいいね」
テストがはらんしつつかあった一頃まえには、こんな会話が、あちこちで交わされたのでした。

こんなバカ／＼しいことばのやりとりが、やっとかげをひそめて、やれ／＼とおもっていたら、ついこのあいだは、都電の中で、

A 「あなたのところでは、どの知能テストやるおつもり？」

B 「テストなんて、もうフルイわ。もっぱら、詩吟でゆきたいのよ」

という、めずらしい会話に耳をくすぐられました。幼稚園の先生かどうかはわからなかったのですが、竹ヤリでも持った

ら、いかにも似つかわしそうな風貌の人だったことはたしかでした。
(お茶の水女子大助教役)

学生集 宝仙学園短期大学

○保育科

30名 (幼稚園教諭二級授与)
(普通免許状)

○願書受付

1月10日より3月20日まで

○試験科目

国語・音楽・体育・口答試問

○寄宿舎完備

本学園は都心には稀れな緑林に囲まれた数千坪の校地を有し、高等学校、中学校、小学校、及び感応幼稚園を経営する総合学園です。新宿より、都バス、都電にて、五分、国電東中野駅より徒歩十分、交通は至便です。

東京都中野区宮前町46 電話中野(58)3511番